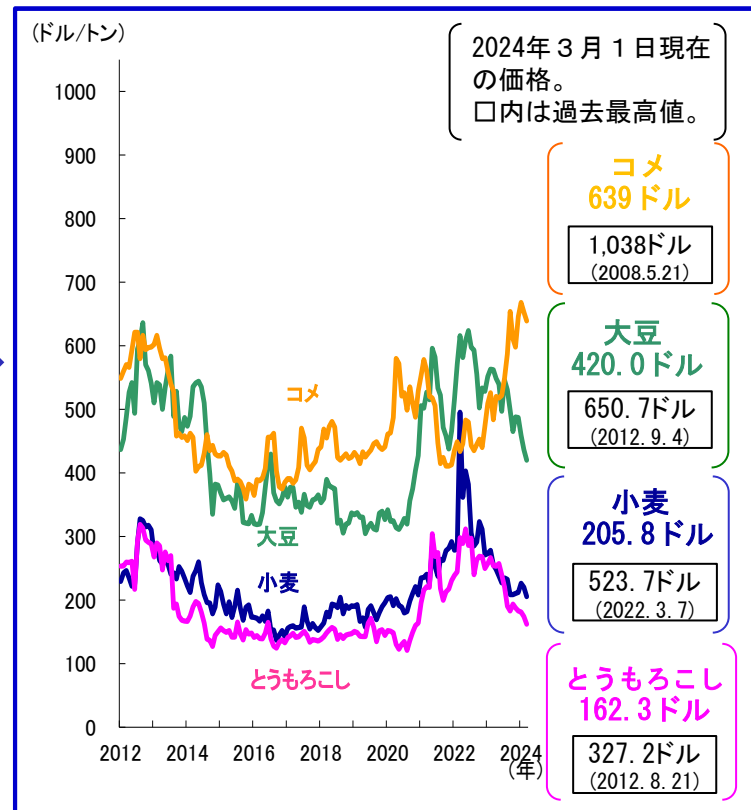
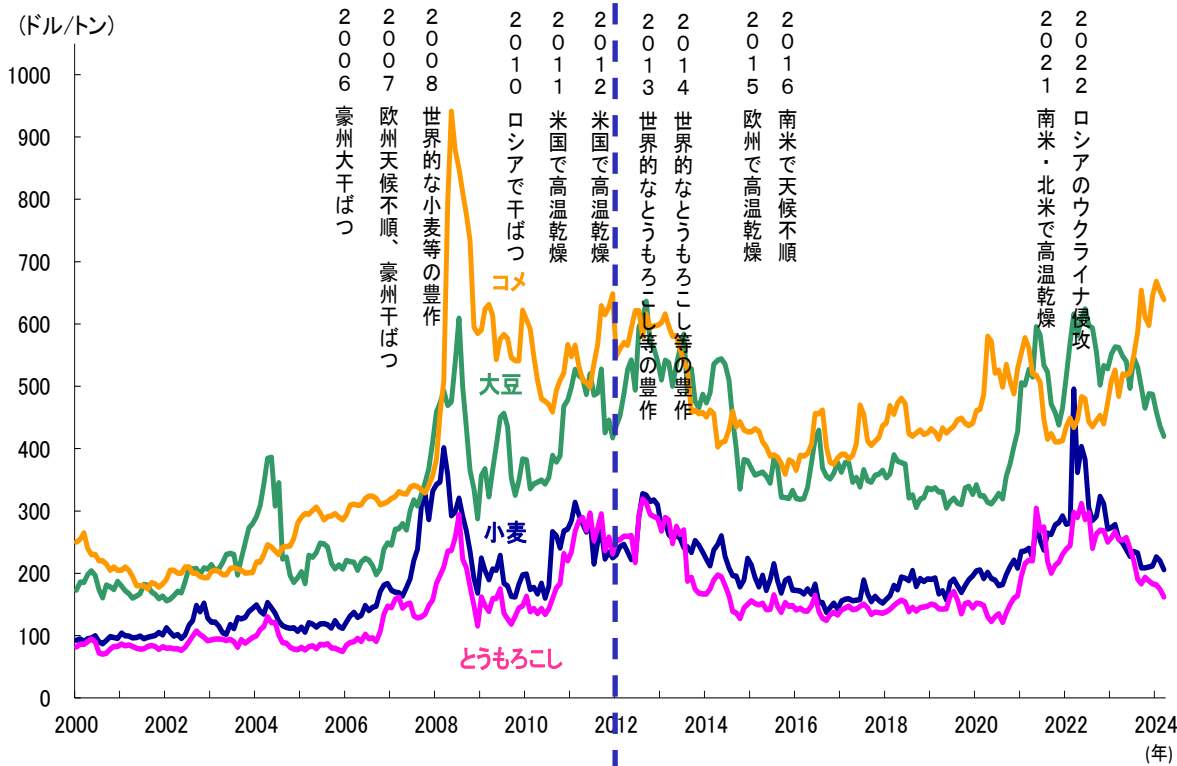


資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

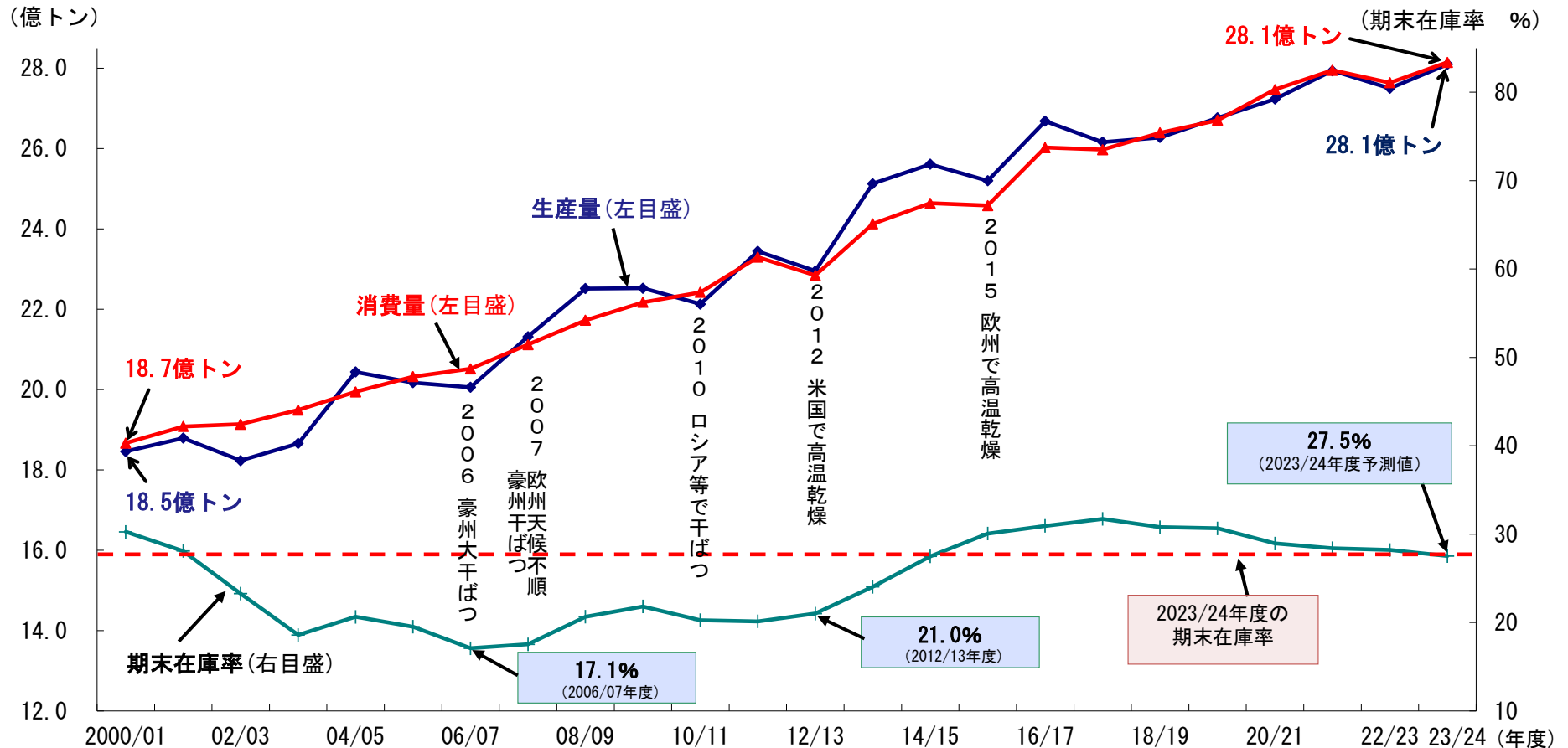
なお、コメ価格は2024年2月28日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

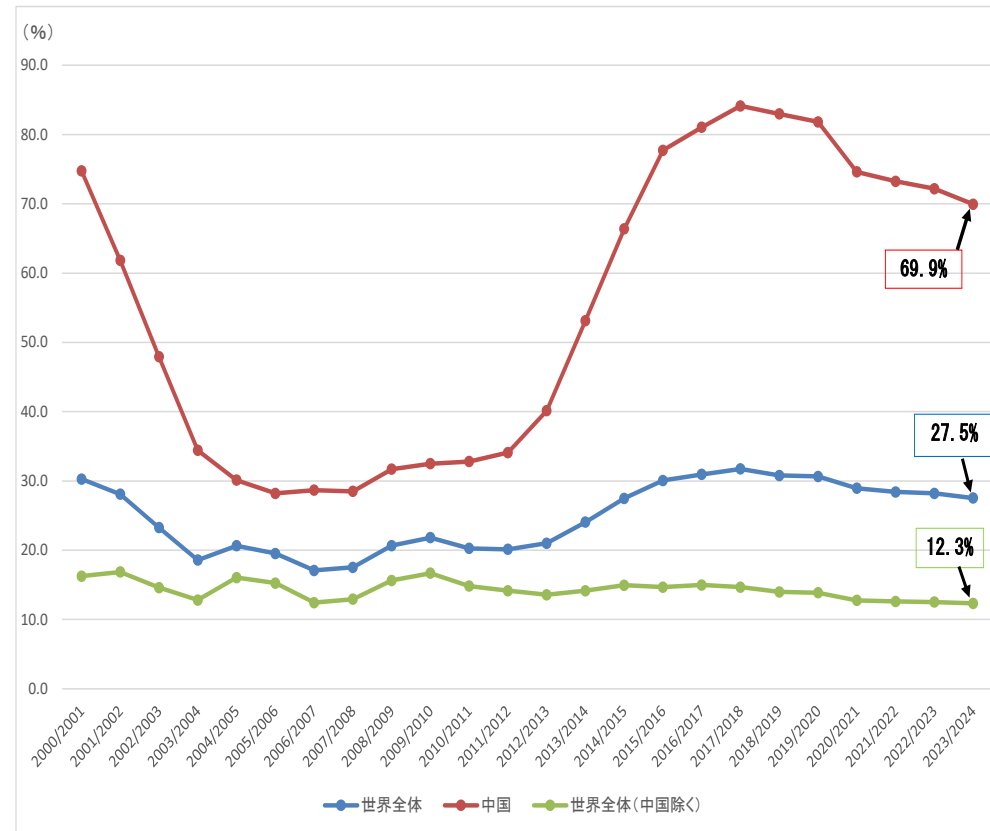


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (March 2024)、「PS&D」

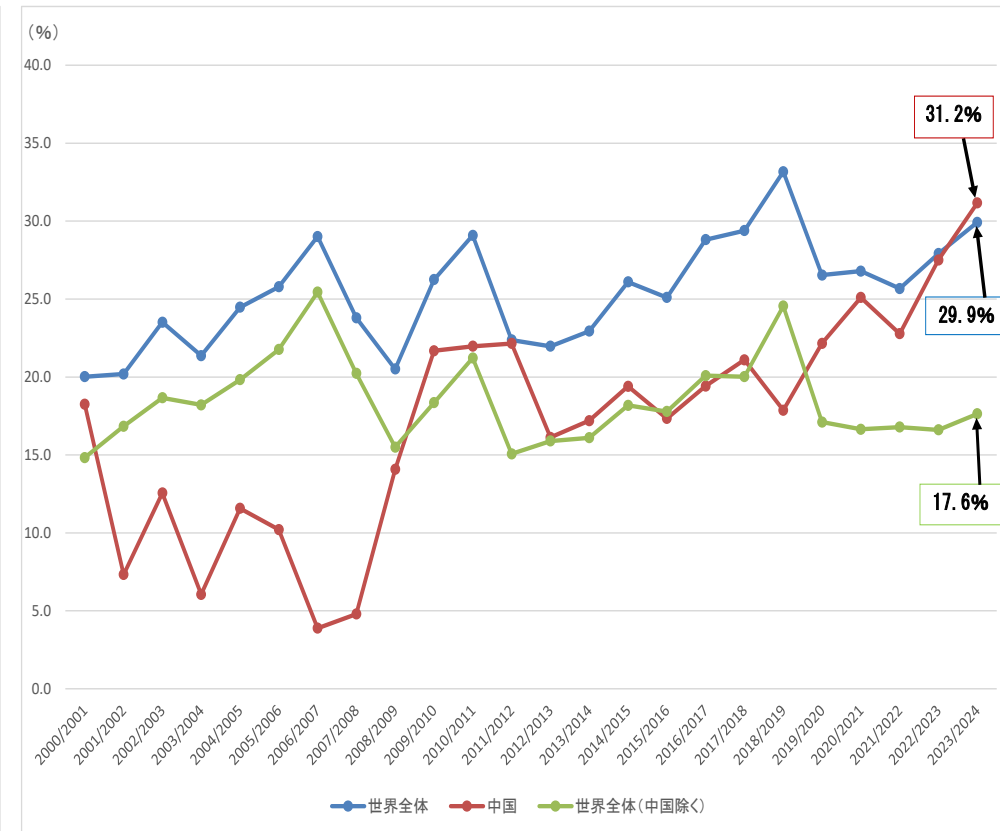
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 8, 2024)

注: 1) 穀物とはとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

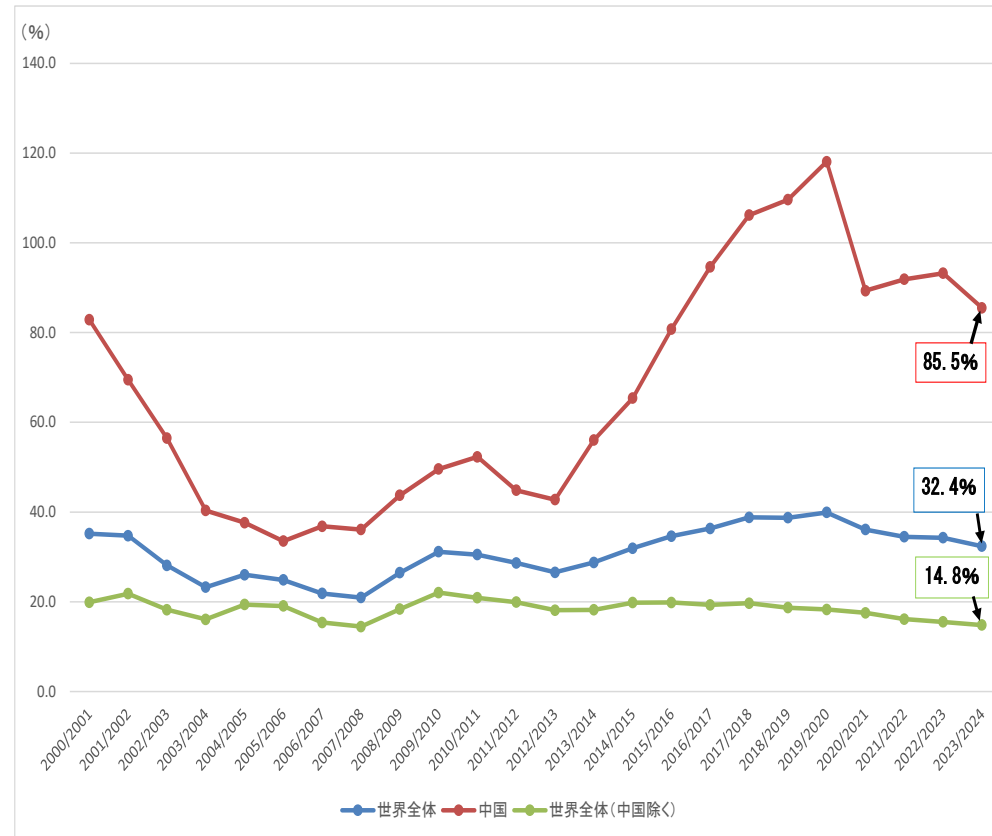
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

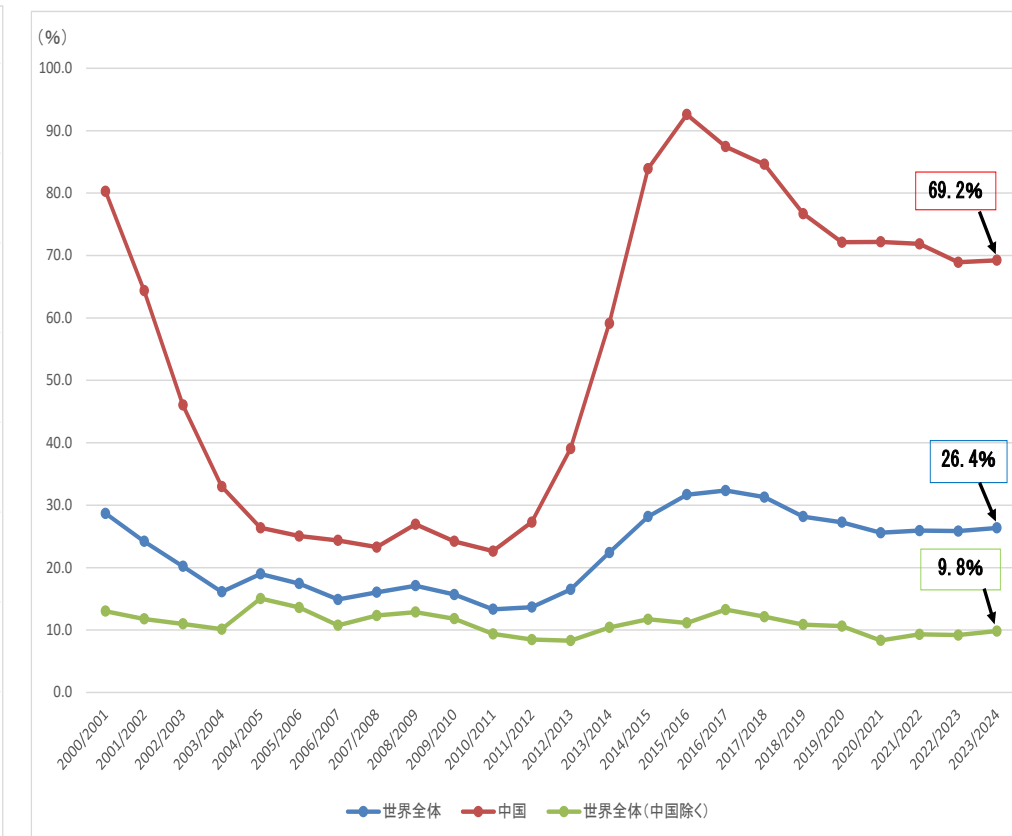
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料:米国農務省「PS&D」(March 8, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

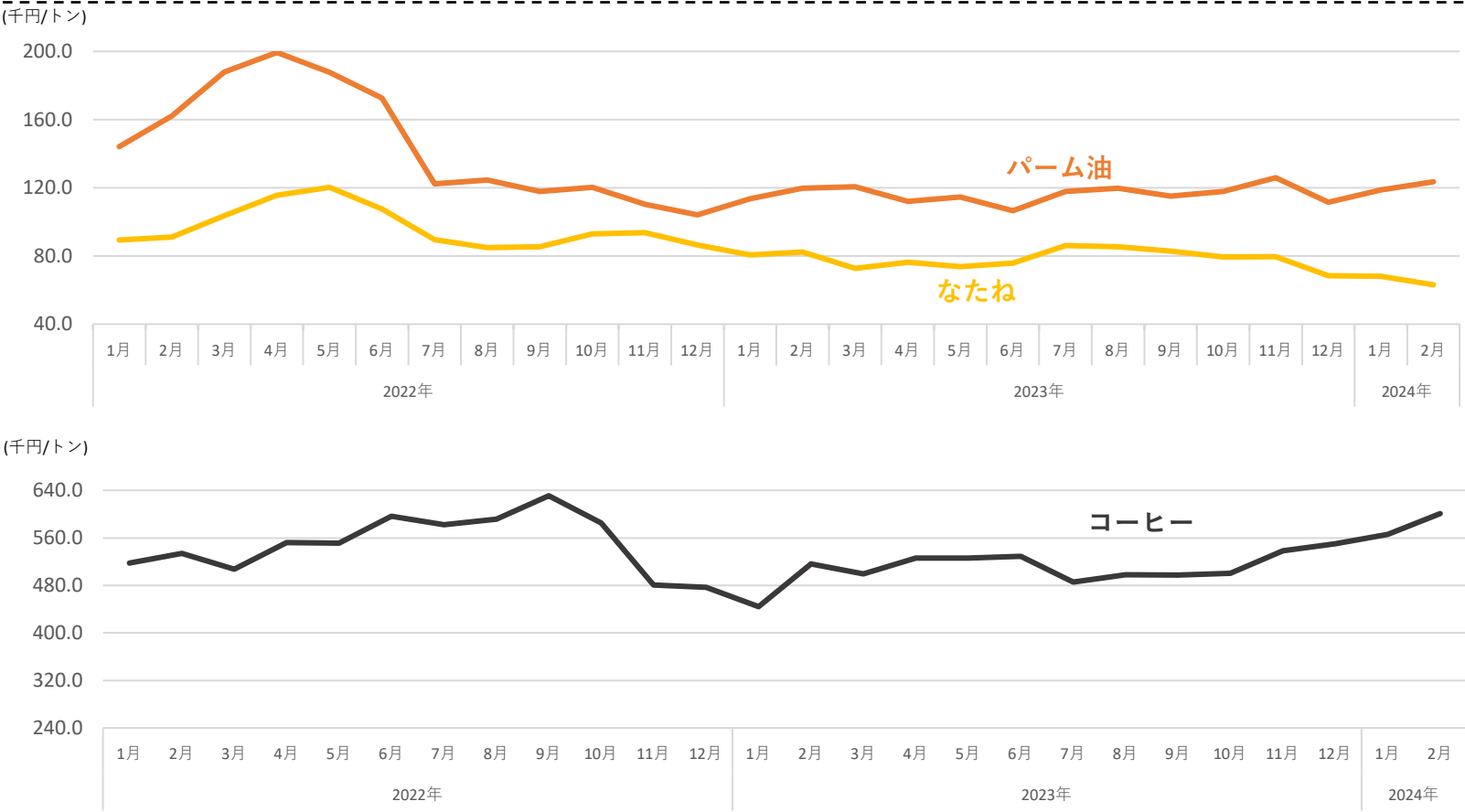
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、2021年に主産地であるカナダで減産があったが、2022年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（2022年5月23日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも2022年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面では、従来はアメリカやヨーロッパが消費の中心であったが、近年は中国やインドといった人口の多い国での消費の拡大等により、コーヒー消費量が増加したことを受け市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2024年3月20日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
123.7 千円/トン

199.5 千円/トン
(2022.4)

なたね
63.1 千円/トン

120.3 千円/トン
(2022.5)

コーヒー
601.1 千円/トン

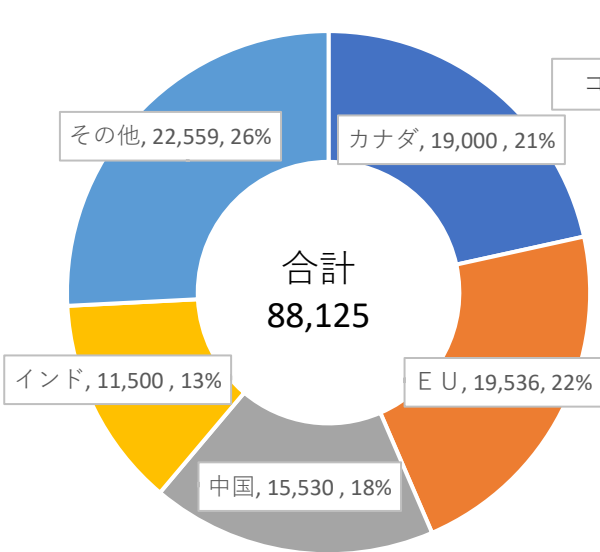
631.1 千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

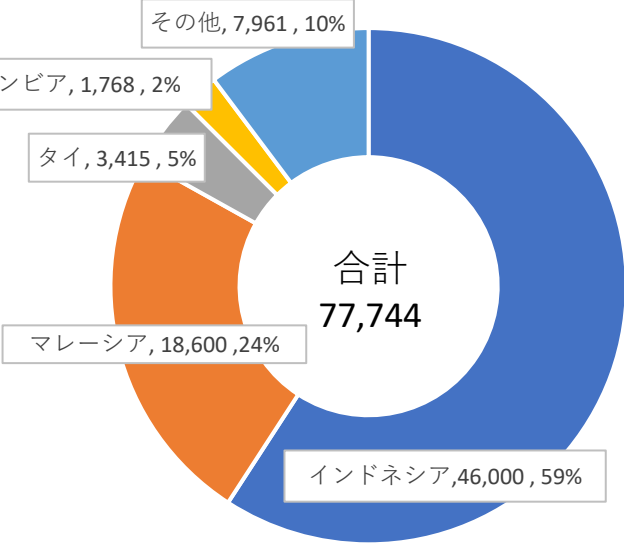
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



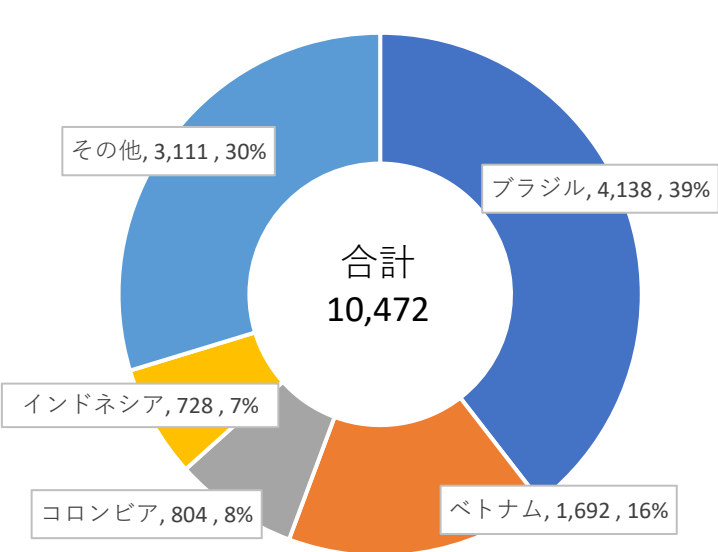
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1										
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5										
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7										
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2										
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1										
前月比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2										
前年同月比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は112.6～154.2（前年同月比で-7.7%～20.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年9月～令和6年2月）

消費者物価指数（総務省）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6		
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	122.5	122.7	123.2	122.7	122.1	121.8	6.0%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	123.3	125.7	122.9	122.2	122.2	125.2	9.2%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	116.3	117.2	117.0	117.2	116.9	117.5	6.4%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	157.7	156.6	154.8	153.2	152.8	151.3	-7.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	108.8	110.8	111.4	111.0	111.5	112.6	6.3%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	154.7	154.2	153.9	154.7	153.5	154.2	12.4%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	135.2	135.0	131.3	133.0	132.7	9.3%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.5	111.6	111.3	115.5	119.0	119.1	20.8%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	114.3	114.8	115.2	115.1	115.0	115.1	5.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年9月～令和6年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5				R6				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	118.2	118.0	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	1.0%	6.6%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	121.6	122.2	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	0.0%	9.4%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	0.3%	4.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	158.7	156.8	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	-0.6%	-7.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.6	109.4	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	-0.2%	6.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	144.1	144.8	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	-0.7%	10.1%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	130.3	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	0.8%	10.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.7	111.4	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	0.0%	20.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年4月号（3月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）23年の牛肉輸出量、前年比14.3%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003167.html

（豪州）23年第4四半期、雌牛の保留などだと畜頭数と牛肉生産量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003168.html

（アルゼンチン）23年の牛肉生産量、肉用牛と畜頭数は干ばつの影響で前年比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003169.html

◆豚肉

（米国）23年の豚肉輸出量は前年比7.5%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003170.html

（EU）豚肉生産量の減少が続ки、枝肉価格は高値を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003171.html

（中国）豚肉価格の低迷を背景に繁殖雌豚頭数は適切な水準に近づく

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003172.html

◆牛乳・乳製品

（EU）23年の生乳出荷量は前年並み、主要乳製品生産量は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003176.html

（豪州）23/24年度上半期の生乳生産量、前年同期を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003177.html

（NZ）GDT平均価格が続伸、23/24年度の生産者支払乳価は引き上げへ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003178.html

※GDT価格…グローバルデイリートレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）ブラジルのトウモロコシ生産量は下方修正も、世界の生産量は過去最大の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003185.html

（世界：大豆）ブラジル大豆生産は下方修正も、期末在庫は引き続き前年度増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003186.html

（米国）米国のトウモロコシ生産、輸出量は大幅増も、生産者平均価格は下落見込み

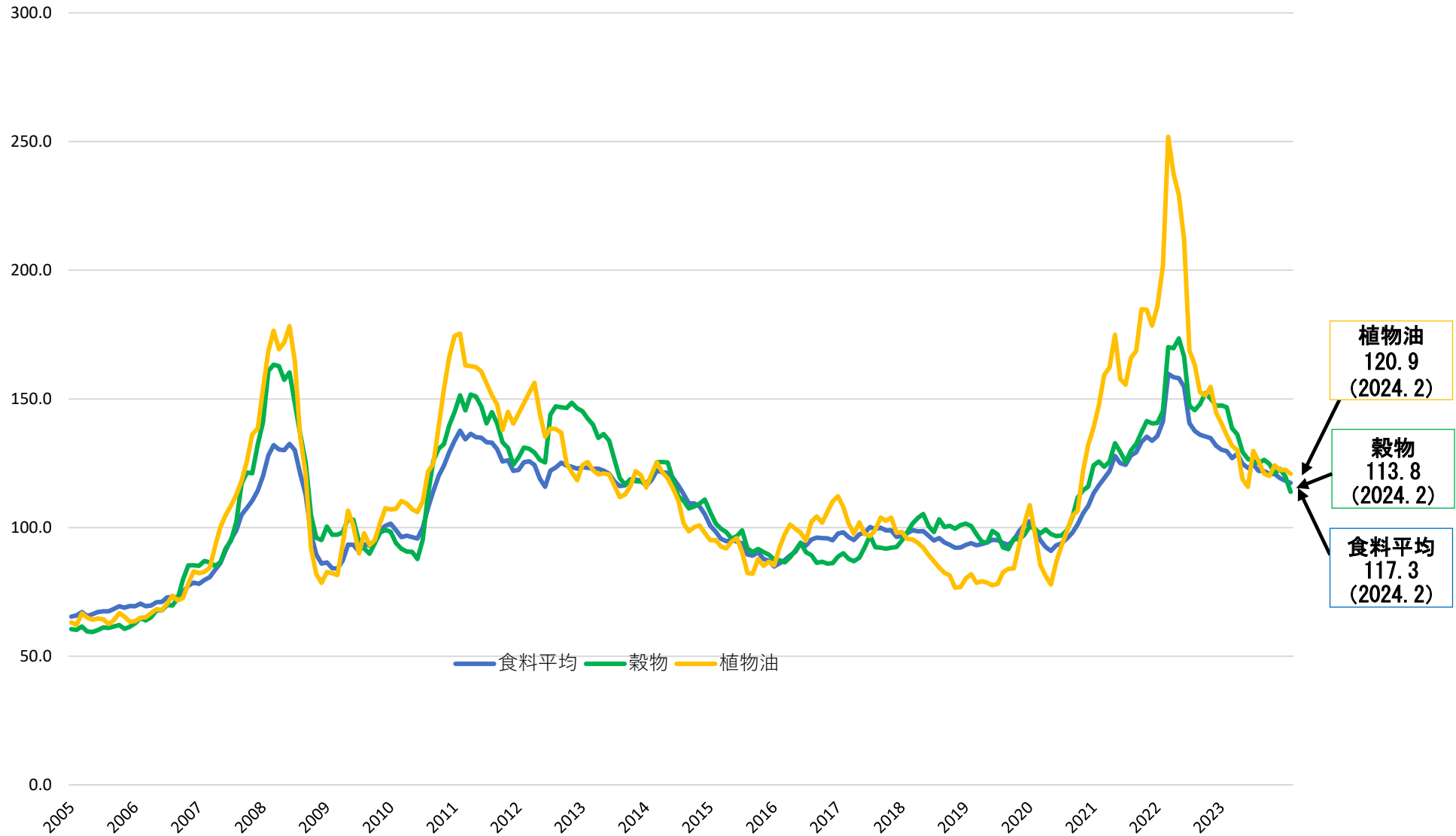
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003187.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003188.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.3)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ブラジル便り①：大豆・とうもろこしの生産現場から

読者の皆様は、ブラジルの農産物といえば、何をイメージされるでしょうか？

多くの方は、コーヒー豆とさとうきびをイメージされるのではないのでしょうか。ただ、近年は大豆・とうもろこしの増産が進み、これらの輸出量は世界第1位となっています。今回、ブラジルの大豆・とうもろこしの主要な生産地であるマツト・グロッソ州を訪問した話を中心にご紹介したいと思います。

1. ブラジルは農業大国

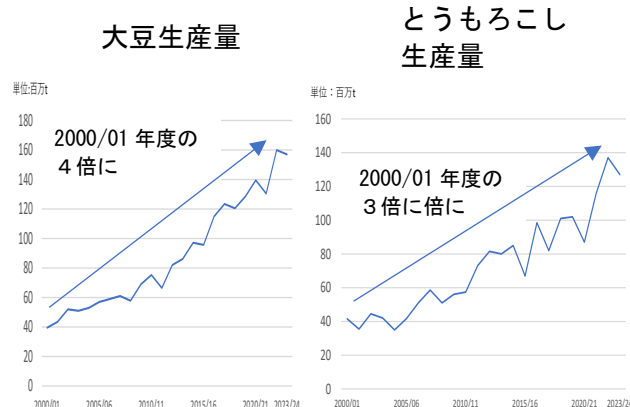
USDAによれば、2023/24年度の生産量について、大豆は世界第1位の1億5,700万トン、とうもろこしは米国、中国に次ぐ世界第3位の1億2,700万トンです。近年、世界的な飼料用作物の需要が高まりを受けて、大豆・とうもろこしが急速に増産されています（図1）。ブラジルは南半球にあり、北半球の大豆・とうもろこしに対して端境期に出荷できるメリットも背景にあります。

大豆の輸出量は9,950万トン、とうもろこしの輸出量は5,400万トンと、いずれも世界第1位です（図3）。日本にとっても、ブラジルは米国に次ぐ大豆・とうもろこしの輸入相手国（数量ベース）となっています（図2）。

また、畜産物生産も盛んです。2023/24年度の牛肉輸出量は290万トン、鶏肉輸出量も477万トンと、いずれも世界第1位となっています。

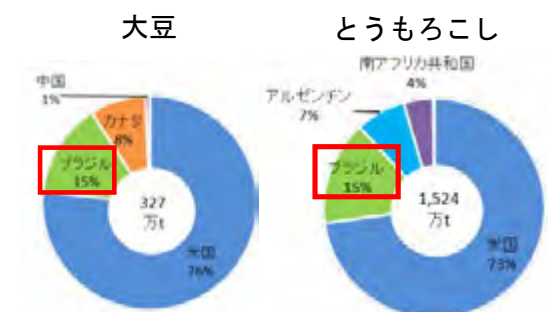
コーヒーと砂糖の生産量も多く、2020/21年度のコーヒー生産量は414万トンと世界第1位。2023/24年度の砂糖も生産量4,100万トン、輸出量3,250万トンと、ともに世界第1位です。

図1 ブラジルのとうもろこし・大豆生産量の推移
(2000/01～2023/24年度)



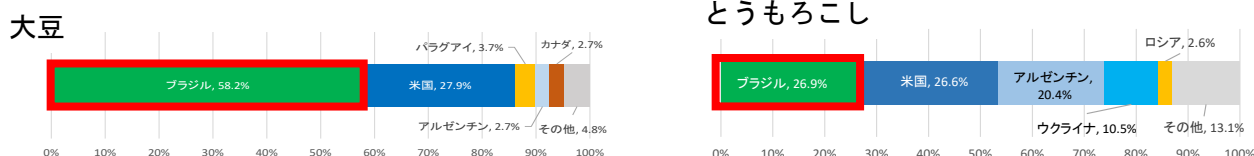
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2024)を基に作成。

図2 日本の輸入量に占める割合(2021)



資料：財務省「貿易統計」(2021年)を基に農林水産省作成。

図3 ブラジルの世界の輸出量に占める割合(2023/24年度)



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2024)を基に作成。

2. 国内の主要生産州

ブラジルの主要な農産物は、大豆、とうもろこし、さとうきび、コーヒー豆の4品目であり、主要生産州は右図のとおりです。

大豆・とうもろこしの主要生産州は、内陸部のマット・グロッソ州、パラナ州、ゴイアス州、マット・グロッソ・ド・スール州です。

コーヒー豆・さとうきびの主要生産州は、海側のミナスジェライス州、サンパウロ州です。

コメの主要生産州は南部のリオ・グランデ・ド・スール州で、主にインディカ米が栽培されています。

ブラジルでは、気候が温暖で降水量が大きいため、大豆・とうもろこしの二毛作が可能です。

とうもろこしは、10月頃に播種し翌年の2～3月頃に収穫する夏とうもろこし、2～3月頃に播種し、6～7月頃に収穫する冬とうもろこしに大別されます。

夏とうもろこしは、とうもろこし全体に占める生産量シェアが2割程度で、畜産が盛んな南部が主産地のため、主に飼料として国内消費されます。

図4 ブラジル農産物の主要生産州



図5 ブラジルのクロープカレンダー（とうもろこし・大豆）

2023/24年度の大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 24.4(百万t)								
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 21.1百万ha												作付 17.0(百万ha)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												収穫 155.3(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート（2024.1.10）

一方、冬とうもろこしは、とうもろこし全体に占める生産量シェアが8割程度で、主として輸出向けであり、米国産のとうもろこしと収穫時期がずれており端境期に出荷できるのが強みとなっています。冬とうもろこしは、大豆との二毛作が主流で、9月以降、順次大豆の作付けが行われ、翌年2月以降の大豆収穫後、一部圃場で冬とうもろこしが作付けされます。

とうもろこしの最大生産州はマット・グロッソ州であり、国内生産の約5割を生産します。

大豆の最大生産州も中西部マット・グロッソ州で、1州で4,000万トンを超す生産量を誇っています。もともと農業に不向きと

されたセラード（ブラジル中央部のサバンナ地帯で低木や草原が広がる地域のこと）に含まれる州ですが、近年、複合経営への転換による作付面積の増加、肥料投入量の増加や施肥技術の向上、最新農業機械の導入による単収増を受けて生産量が急増しました。

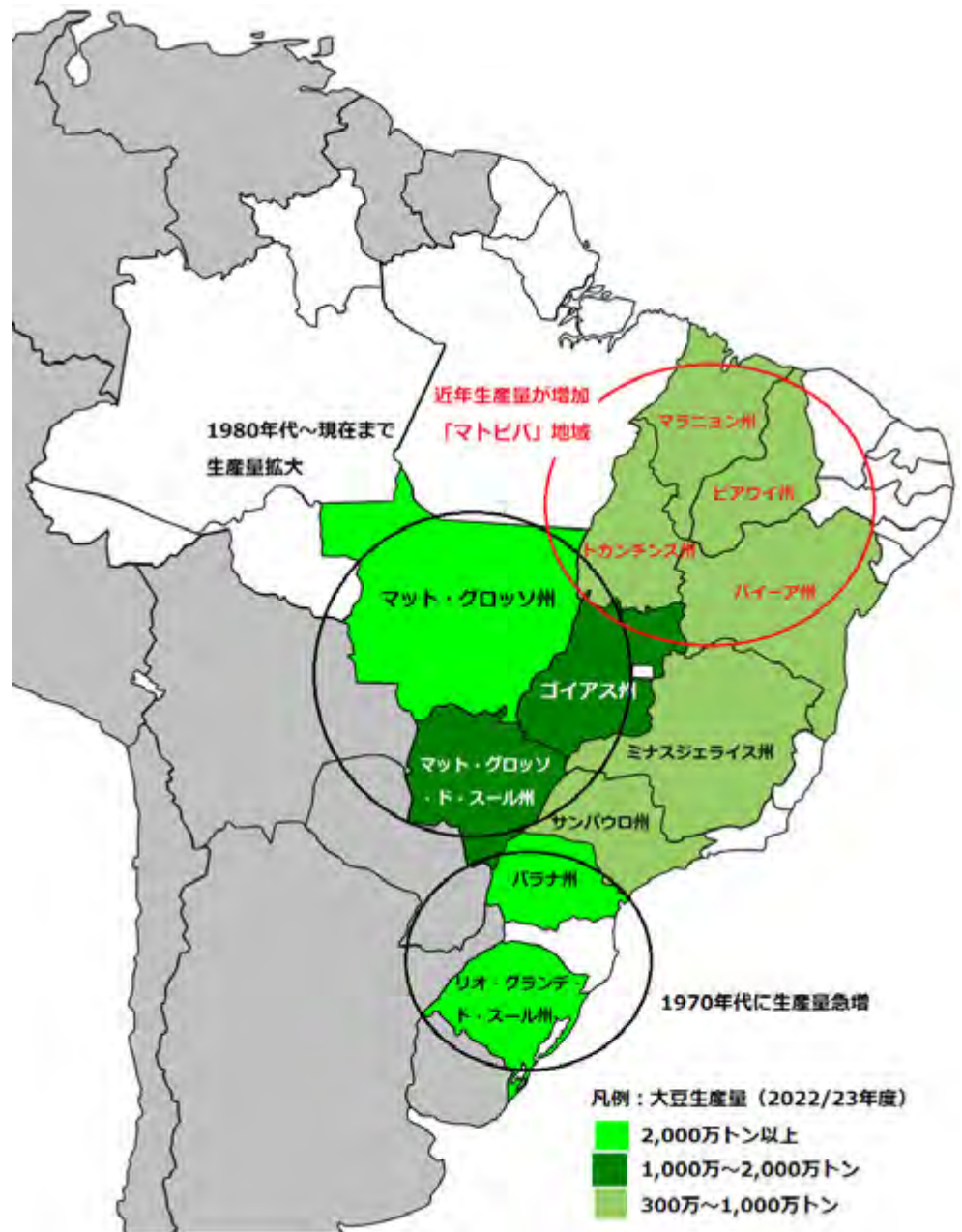
背景には日本によるセラード開発支援もあります。1970年代初めに、当時日本が大豆輸入で依存していた米国が大豆国際相場の高騰を受け、禁輸措置を取ったことをきっかけに、それまでほとんど大豆の生産がなかったブラジルで、日本とブラジルが共同で大豆の開発事業を開始しました。

日系人も多く入植し、強酸性の土壌改良や大豆の品種改良の結果、1975年には南部のリオ・グランデ・ド・スール州やパラナ州を

中心に生産が急増しました。その

後、徐々に内陸部に農地開発が広がり、2023年にはマット・グロッソ州、ゴイアス州等でも生産が拡大しました。近年では、州の頭文字（マラニョン州、トカンチンス州、ピアウイ州、バイーア州）を取って「マトピバ」地域と呼ばれる北部で生産量が伸びています。

図6 大豆の州別生産量（2022/23年度）



資料：CONAB「穀物レポート」（10 January 2024）を基に作成。

3. ブラジルの生産現場

昨年11月、マット・グロッソ州の農村組合及び大豆・とうもろこし農場を訪問しました。

この州の歴史は比較的浅く、農地開拓は、サンパウロ州やミナスジェライス州の人々が移住した40～50年前に始まりました。平坦な土地で日照時間も長く、降水量も多いため、大豆・とうもろこしの二毛作だけでなく、大豆・とうもろこし・牧畜（牧草地）の三毛作も行われていました。

訪問した圃場の規模は1,200ヘクタールであり、この州では中規模とされています（写真4）。

11月上旬は大豆の生育初期であり、圃場では大豆が播種されていました。

圃場には、とうもろこし収穫後の残渣が残されており、カバークロープとして大豆の発芽時に高温障害を防ぐ効果があり、単収向上に貢献しています（写真5）。

訪問した圃場では、GPS搭載の播種機、収穫機による自動化が進んでいました。播種機は一日100haの作付けが可能で、オペレーターに撒いていない列があると伝えたり、撒いたところでは播種を自動的に止めたりします（写真6）。

収穫機は一日8ha程度を収穫可能で同時収穫のために3、4台保有しているとのこと。



写真4 中西部マット・グロッソ州の大豆圃場風景



写真5 とうもろこし残渣によるカバークロープ



写真6 大型播種機

また、広大な農場から数十メートルごとに土壌をサンプリングし、分析して不足した肥料を投入する精密農業が実践されており、訪問した農場では経営者の娘さんが農業技師として、土壌の向上に取り組んでいました。その圃場では酸性土壌を改善するために石灰を投入する必要があるとのことでした。

このように、ブラジルでは、新大陸らしく大規模で自動化された農業が展開されており、二毛作・三毛作を利用した圃場の利用効率の向上、土壌分析による肥料の適切な投入等により生産量を増加させてきました。

次回、ブラジル便り②では、生産した穀物をどのように輸出港まで運ぶのか、という輸送面を中心にお話ししたいと思います。



写真7 圃場の土壌分析について説明する農業技師

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課 食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員をはじめ、関係者の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

- ・ USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 January 2024)
<https://www.usda.gov/oce/commodity/wasde>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de GRAOS」 (10 January 2024)
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/graos>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de Café」
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/cafe>
- ・ Conab 「Safras Brasileira de Cana-de-Açúcar」
<https://www.conab.gov.br/info-agro/safras/cana>
- ・ 和田昌親編著（2011）、「ブラジルの流儀 なぜ「21世紀の主演」なのか」、中公新書
- ・ JTB パブリッシング（2018）、「ひとり歩きの会話集⑨ ブラジル・ポルトガル語」
- ・ 宮路秀作（2022）、「地図でスッと頭に入る 世界の三大穀物」、昭文社